

# スピーキングとライティングを 統合した授業内活動と Self Correction 能力の育成

遠藤修史



## ■ はじめに

2020年度の入試制度の変更に伴い、和文英訳ではなく自由記述型のライティング能力の育成が急務となった今、新しい指導法を模索する動きが活発になっている。本稿では、生徒のライティング力を伸ばすのに効果のあった前任校での授業実践を紹介する。使用した教科書は大修館書店発行の *Departure English Expression I Revised* で、平成30年度の4月より1学年の英語表現の授業を1年間実践した。授業はオールイングリッシュ・チューデントセンタード型のアクティブラーニング授業で、生徒の発信力をバランス良く高められるような授業実践に努めた。

## ■ 授業実践内容

各レッスンを1時間ワンセットで実践する。

**1時間目** ※授業のゴールは「文法項目を含んだ自分の英文が言える書ける」

1.ウォームアップ活動として、ペアでスモールトーク→全体でシェア。 2.宿題で取り組ませておいた文法項目の演習問題の解答をグループごとに出す※話し合いのみ日本語使用可→クラス全体で答えの確認。 3.文法項目を含んだ自分の英文を各自ノートに書く→グループ内でシェア→全体でシェア。

**2時間目** ※授業のゴールは「各レッスンの指定トピックに関する英文パラグラフが書ける言える」

1.そのレッスンのトピックについての理解を深めるためのリスニングないしリーディング活動(レッスンごとに入れ替え)に個別に取り組む→

ペアで答えの確認→全体で確認。 2.パラグラフライティングのための準備活動(英文の空所補充)に個別で取り組む→全体でシェア。 3.パラグラフライティング。手順は次の通り: 個別にパラグラフライティング(7分程度)→ペアでシェア(1回目)。聞き手と話し手の役割を交代しながら互いに書いたものを共有する→アップデート(1回目)。個別に間違いの訂正や、ペアの発表から得たヒントを元に英文の加筆をする→別のペアでシェア(2回目)→アップデート(2回目)→さらに別のペアでシェア(3回目)→全体でシェア。

1月中旬には教科書2巡目に入った。2巡目の授業内容は以下の通りである。

各レッスン1時間で終了し、手順は1巡目の2時間目と共通。各授業のゴールは以下の3つ。

- ・1巡目に書いた英文パラグラフの間違いを訂正・加筆し、より長く優れたパラグラフを書く
- ・1巡目よりも fluency を高めて発表する
- ・発表の後、聞き手は発表内容に関する5W1Hクエスチョンを即興で作って質問し、話し手はそれに適切に答える

## ■ Integrated な活動と Self Correction 能力の育成

これまでのライティング指導では教員が赤ペン添削をするのが一般的であり、私自身も20年以上そうした指導をしてきた。しかし新しい授業を実践するようになってから、実は添削指導を全くしていない。「添削指導をしなくて生徒の accuracy

をどうやって高めるのか」という疑問を持たれる方が多いだろう。

この疑問に対する答えは見出しにある Self Correction 能力と密接に関わってくる。上記教科書 1 巡目の各レッスン 2 時間目では、メインの活動であるペアワークで、生徒はまず自分の英文パラグラフを書く。その後、最初のペアと相互に聞く・話すのペアワークをする。直後のアップデイトイングタイムで、自分の英文に修正を加えていくのだが、こうした指導を実践したことがない先生方には「生徒が自分の間違いに自分で気づいて、しかも修正ができる」という具体的なイメージが湧きにくいかもしれない。その点について、本校の生徒の声を紹介すると以下の通りである。

- ・「読み直しをすると時制等の細かいミスに気がつく」
- ・「音読をするから間違いに気づきやすいと思う」
- ・「読むときは相手に伝えるという意識が強く、フレーズリーディングをするので、自分の英語におかしな所があると話していて違和感がある」
- ・「ペアの内容を聞くことで自分のミスに気づくし、自分の英語をもっと上手い表現に替えられる」等々

生徒は修正を加えながら英文パラグラフを完成させていくこのプロセスを 2 時間に 1 回の割合で経験している。さらに発表時の fluency に関しても同じ英文をペアを替えて複数回実践するので、accuracy と同時に高めることが出来るのである。「教員の添削の無いこの状態で全ての生徒が間違いの無い英文を書けるのか」という疑問があらたに出るかもしれないが、それ故に、教科書の 2 巡目が存在するのだ。前述の通り 2 巡目は 1 月中旬よりスタートした。従って生徒達はおよそ 9 ヶ月前の能力で書いた自分の英文を見直したことになる。この時の生徒の反応を想像できるだろうか。主な声は以下の通りである。

- ・「うわー、なんだこれ。私、これだけしか書け

なかったんだ」

- ・「間違いだらけで笑っちゃう」
- ・「正直、自分がこんなに成長してるとってなかった」
- ・「英語のスピーキングとライティング能力が信じられないほど高くなっている」等々

ほとんどの生徒が各自の能力の伸長を驚きの感情と共に実感しているようだった。教科書 2 巡目のペアワークや全体でのシェアでは各発表後に Q&A を課したので、聞き手側の生徒も前にも増してアクティブリスナーになり、ただ聞くだけではなく相づちを入れたり、聞き取れなかったことの聞き返しをする姿が目立つようになった。2 巡目の全体でのシェアはクラス全員の前に立っての発表であったが、多くの生徒が臆せずに自信を持って発表が出来るようになっていた。

## ■ 授業実践を通し見えてきたこと

私自身にとってもこれまでは教員による添削指導が常識であったが、この 1 年を経て今では正反対の意見を持っている。教員添削の全てを否定しているわけではないが、この指導の短所がはっきりとわかったからだ。添削指導では基本的に生徒は間違いを教えてもらっているだけである。また、先生が直して完璧になった文をさらに優れた文に替えようとはしない。このプロセスでは Self Correction 能力の育成は到底望めないのである。

新しい指導の成果は GTEC 等の外部検定試験の結果にも顕著に表れた。英語 4 技能のうち、スピーキングとライティングの平均スコアが他の 2 技能を大きく上回り、1 年間の伸び率も他の 2 技能を圧倒する結果となった。

スピーキングとライティングは能動的活動である。故に、この 2 技能の能力を向上させるには、間違いを含みながらアウトプットを繰り返し、訂正を重ねるプロセスが不可欠である。今後も試行錯誤を重ね、能力育成を図っていきたい。

(えんどう ひさし・山梨県立甲府第一高等学校教諭)